

## 紀行文「海道記」について

千葉 覚  
小室 啓子

はじめに

鎌倉への旅がどのようなものであったか、またその目的は、その執筆の動機は、と先学、同学の方々の優れた論文がみられる。その一つ一つの見識に接し、深く感銘するとともに種々ご教示いただいた。ここではそれらの卓見に拠りつつ、一つの愚見を述べていきたい。

旅の日記である紀行文もさまざまな観点から論じることができ、旅先の地から何を持ち帰り、どのような影響を受けたかとか、また「島国の自閉的な文化伝統」(芳賀徹氏『国文学・解釈と教材の研究』第25巻7号・昭55六月号)という、地理学の発達した近代的視点から従来の紀行文を見ることが可能かもしれない。ここではごく一般的な見方である日常性からの離脱という点に立って考えてみたい。当時の旅は(現代の旅行でも)、日常性から一旦離れた特別な体験である。普段見慣れた物、聞きなれた物などの生活から離れて、新たな発見とか感動とか、時には人生を左右するほどの出来事を体験する場合もある。「海道記」の作者は「京」の人間である。その「京」での生活から離れ、鎌倉へ向かう旅に出発したのである。

この故に、一朝の春の梢は、東風にあふがれて恵をまし、四海の潮の音は、東日に照らされて波を澄ませり。貴賤臣妾の往還する多くの駅の道、隣をしめ、朝儀国務の理乱は、万緒の機、かたがたに織りなす。羊質、耳の外に聞きを成して、多歳をわ

たれり。舌の端に言ふをして、幾日をか送るや。心船いつはりの為に漕ぐ、いまだ海道万里の波に棹ささず。意馬あらまじはず、関山千程の雲に鞭うたず、今、すなはち、芳縁に乗じて、俄に、独身の遠行を企つ。

(本文は『新編 日本文学全集』小学館「中世日記紀行集」に拠る。以下も同)

ここには幕府の善政の賞賛がみえる。多少の誇張も感じられるが、幕府の力のおかげで世の中が治まっていると述べている。そしてそのことに無頓着であった短慮を恥じ、今回、好機を得て鎌倉に旅立つことになったというのである。当然、その作者の言葉には旅への前向きな姿勢を感じることができる。

この道は、苦し、四道の間、逸興の勝れたるか、はた又、孤身が斗敷の今の旅、始めなればか、過ぎ馴れたる旧客、猶ながめを等閑にせず、況や、一往の新賓なれば感思おさへがたしとある所から当然、鎌倉の地だけでなく、途次の東海道にも興味を抱いているが、住み慣れた「京」を離れ、積極的に鎌倉へ向かう作者の意図は無視できないと思われる。すでに出発点である「京」に視点を置き、旅への影響を論じた吉良裕美子氏の御論考がある(『海道記』における「都」の意味―「出発点」が旅に及ぼす影響―『言語・文学研究論集』1 百合女子大学2001・3)。これも、吉良氏と同発想とも言えるが、あくまでも「離脱」を論点の中心に置いて述べてみたい。

〔一〕「京」という自然環境からの離脱

「京」は盆地に存在する。遠くに山波があり、それに囲まれた空間である。その盆地空間からの離脱という点からまず見ていく。

「京」の近辺には見られない特別な山(富士山など)でなければ、山波は普段から見慣れた環境であろう。作者が強く感慨を抱くと考えられるのはいわゆる海辺の道、海道ではないだろうか。「海道記」の「海道」はもちろん「東海道」のことであるが、前にも揚げた一節「心船いつはりの為に漕ぐ、いまだ海道万里の波に棹ささず。意馬あらましにはす、関山千程の雲に鞭うたず」(傍点筆者、以下同)という「東海道」の旅の比喩においても、また「行々として重ねて行きたり、山水野党塘の興、壯観をまし、歴々としてさらに歴々たり、海村林邑の感、長命なり」という対句にも表現されている通り東海道の「海道」は、この街道の一つの大きな魅力または特徴でもある海の道であり、作者の日常では見られない景趣であり、当然注目するはずである。もちろん海浜の景趣に初めて接するわけではない。鎌倉の湯井の浜の様子を「大淀の渡にことならず」と伊勢の国の海岸に比している所などをみると、いろいろ海浜の旅の経験はあるのであろう。(ただしこの「大淀の渡」の場所においては異説がみえる)

ではどのように描いているのかみていきたい。いよいよ本格的に海の道に至ったのは「鳴海の浦」である。

この浦を遙かに過ぐれば、(中略)西天は溟海漫々として、雲水蒼々たり。中上には一葉の舟かすかに飛びて、白日の空にのぼる。かの振男の船のうちにして、などや老いにけん。蓬萊嶋は見ずとも、不死の薬は取らずとも、波上の遊興は、一生の歡会、これ延年の術に非ずや。

老いせじと心をつねにやる人ぞ名をきく嶋の薬をもとる

決して客観的に風景を描いているのではなく、あくまでも作者個人の印象を吐露していく形をとっている。その際、特に漢学の素養を駆使して焦点化いくのが全編に渡っていることは言うまでもない。作者が概念なり印象なりを明確化しようとするにはどうしても漢籍の表現を必要と考えているのである。和文調の表現が決して無いのではなく、漢文調の表現にこだわっている。そして概念の象徴化として和歌が詠まれることになる。ここでの印象は大海原を前にしての延命長寿の念である。老いまいと常に心を晴れやかにしている人が蓬萊嶋の不死の薬を得るように長生きするのであると歌に詠んでいる通りである。美景からの感動が延命感という心まで昂揚させている。「京」の盆地空間では得られない感動である。またこの場面では引き続き蟹の描写がみえる。

猶、この干渴を行けば、小蟹ども、おのが穴々より出でて、蠢き遊ぶ。人馬の足に周章で、横さまに跳り平さまに走りて、己が穴々へ逃げ入るを見れば、足の下にふまれて死ぬべきは、外なる穴へ走り生きて命を生き、外におそれなきは、足の下なる穴へ走り来て踏まれて死ぬ。憐れむべし、煩惱は家の犬のみならず、愛着は浜の蟹も深き事を。是を見てはかなく思ふ我等は、賢しや否や。生死の家に着する心は、蟹にもまさりてはかなきものか。

誰もいかにみるめあはれによる波のただよふ浦にまよひきにけり延命からの連想でもあろうが、小さな蟹たちの動きに関心を寄せている。右往左往しながら生き延びるのに必死な蟹たちの動きから煩惱や愛執に迷う人間の姿まで感慨が深まっていく。このような内的深まりは「内面の旅」とでも言えるのであろうか。このような点も指して「此は羈中の景趣にあらず。存外の浅き狂言なり」と作者が跋で述べる所であろう。海辺の描写は続く。高志山から遠江国に入ると

この山の腰を南に下りて、遙かに見くだせば、青海浪々として、白雲沈々たり。海上の眺望は此処に勝れたり。(中略) 優興にとどめられて暫く立てれば、この浦の景趣は、窺に行人の心をかどぶ

行き過ぐる神も塩屋の夕煙たつとも海士のさびしとやみぬ

勝れた海上の眺望に深く感動する中で、塩屋から昇る夕煙のうら寂しさも、伝統的美意識に拠った風雅の世界のことである。橋本の宿の夜も

大方、鞆中の贈物は、此処に儲けたり

橋本やあかぬ渡とききしにもなほ過ぎかねつ松のぬらだち

波枕よるしく宿のなごりには残して立ちぬ松の浦風

さまざまに興味に、聞きなれない波の音も名残となるほどである。浜松の浦では

優なるかな、艶なるかな。忘れ難し、忍び難し。命あらば、いかでか、再び来りてこの浦を見む。

と深い感動が続く。武田孝氏が「海に縁のない京都の生活の中では見られなかった珍しさも、大いに影響しているのだろう」(『海道記全釈』笠間注釈叢刊14 P 197-198)と述べられている通りである。駿河の国、宇土の浜も久能寺の天女の舞の伝説と美景が相伴ってすがすがしく描かれている。

江尻の浦では広々とした海に一艘の舟が浮かんでいるのを見て

漁父が網を引く、身を助けんとして身を勞れしめ、游魚の釣をのむ、命を惜しみて命を、滅ぼす。人、幾ばくの利をか得たる、魚、幾ばくの餌をか求むるや。世を渡る思、命をたばふ志、彼も此れも共に同じ

とまた「内面の旅」の描写がみえる。生命ある物が懸命に生きることは皆同じであると述べたいのであろう。続いて、「樵夫」と「商客」の渡世の苦しみを述べて

人ごとに移る心はかはれども世をすぐる道はひとつなりけり

と人により従事する仕事は異なっているも命を大事にして生計を立てていこうとするのは同じであると和歌に詠む。そしてさらに、この浦を遙かに見たて行けば、海松は浪の上に根を離れたる草、海月は潮の上に水に移る影、ともにこれ浮生を論じて人をいましめたり。

波の上にただよふ海の月も又うかれ行くとぞ我をみるらん  
と人生のはかなさを述べ、自己を戒めている。人間への、また浮かれ行く自己への戒めとするならば、裏返せば限られた生を懸命に生きることへの奮起ともなる。ここには生きることへの前向きな姿が感じ取れる。次の清見潟も同様である。評判通りの美景に感動し、心までが清澄になり、

吹きよせよ清見浦風わすれ貝ひろふなごりの名にしおはめや  
語らばや今日みるばかり清見潟おぼえし袖にかかる涙は

(傍点筆者)

と和歌に詠む。そこにはこれからも続く生への期待が秘められている。この歌に続き、

海老は波に泳ぎ、愚老は汀に溺ふ。共に老いて腰ががまる。汝は知るや、生涯浮める命、今いく程と。我は知らず、幻の中の一瞬の身。

と再び人生のはかなさを述べる。生への期待とか執着とかは生の無常と一見対立しているようだが、作者は表裏一体にして考えていると思われる。そしてそれは生の充実を願うものといえる。

海浜の描写はまだ続く。大和田の浦では「海館の中に、この処は心をもとめて身をばとどめず」、地理上に問題はあるが、千本の松原では「行く行く路を顧みれば、前途いよいよゆかし」と期待通りの美景に旅の前途にさらなる興味を抱く。そしていよいよ相模の国に入り、逆川の宿の描写となる。

時に、暮れ行く日脚は、影を遠嶋の松にかくし、来り宿する疎人は、契りを同駅の席にむすぶ。かの草になつく疲馬は、胡

国を偲びて北風に嘶へ、野に放つ休牛は、異地にならひて夜の月にあへぐ。棹歌数声、舟船を明月峽の口によせ、松琴万曲、琵琶を尋陽江の汀にきく。一生の思出は今夜の泊にあり。

行きとまる磯辺の浪のよるの月旅寝の袖にまたやどせとや

海浜の描写でもこの逆川の夜は今までとは異なった哀感漂う調子になっている。橋本の宿では聞き慣れぬ波の音や舟人の唄に寝覚めているが、それは都人には体験しえぬ珍しさのためであり、この逆川のように哀調に満ちたものではない。さらに続いて大磯・小磯の浜での描写も逆川と同様に以前とは違う雰囲気漂う。

大磯の浦・小磯の浦を、遙々と過ぐれば雲の橋、浪の上に浮かびて、鵲の渡守、天津空に遊ぶ。あはれ、さびしき空かな。眺め馴れてや人は行くらん。

大磯や小磯の浦の浦風に行くともしらずかへる袖かな

ここでは以前には見られない寂寥感が漂う。全く海浜では見られなかった哀感や寂寥感が強く表れている。逆川での哀感「疲馬」や「名月峽」や「尋揚江」など、『文選』・「和漢朗詠集」・『白氏文集』に基づいた表現が関係している。「胡馬ハ北風ニ抛リ、越鳥ハ南枝ニ巢クフ」(『文選』巻二十九・古詩『新釈漢文大系』15明治書院)強く故郷を偲ぶものであり、「巴猿一叫び、舟を名月峽の辺に停む 胡馬忽ちに嘶ゆ 路を黄磧の裏に失ふ」(『和漢朗詠集』「山水」)。講談社学術文庫本より抄出)は深い旅愁を述べる一節である。さらに『白氏文集』の「琵琶行」は尋揚江に左遷された白楽天が、もと長安の都の妓女が弾く琵琶の哀調深い音色に感涙した名高い詩句であり、これらがこの逆行の描写の背景にあることは言うまでもない。「琵琶行・並びに序」にある「是の夕べ始めて遷謫の意有るを覚ゆ」(『中国詩人選集』岩波書店から抄出)が左遷されて淪落した我が身を、今夜という今夜痛切に感じたことを言い、それが「海道記」の「一生の思出は今夜の泊まりにあり」の解釈に特に「淪落」という点を重ね合わせて考えられるのである。これらの旅

愁や哀調がなぜ逆川の手でえがいているのか。それまでの海浜における生き生きとした感動や観照が見られない。その点は大磯・小磯の描写でも同様で逆川の延長と見ることができるといえる。「雲の橋」は何度も見てきているし、「鵲」の他に「鷺」も「鵲」も見ている。にもかかわらず「あはれ、寂しき空かな」と深く沈んだ描写になっている。旅愁なのであるか。旅の疲れなのであるか。大磯・小磯での和歌に見える「かへる」の表現が気にかかる。西にある都の方へ袖が翻って帰そうとするのは浦風だけでなく、作者自身の心でもあるのであろう。またその後の海浜の描写は淡白になっている。

「京」からの離脱として自然環境を基に、海浜の情景の描写を見てきたが、海浜だけに限ってみると、相模の国の描写は哀調に満ち、また寂寥感に溢れ、さらに淡白になっていく。この原因はやはり前後にみえる宗行・光親・有雅そして範茂などへの思いが関係するのであろうか。承久の乱で命を落とし、生きること全うできなかった人々の縁りの地を訪れ、痛切な思いを巡らせたことが原因なのであろうか。どうもそうとしか考えられない描き方である。

## (二)「京」における生活そのものからの離脱

作者の「京」での生活は序の部分などから窺える。以前は立身出世の夢を持っていたが今はかなわず、不運の身をかこちながら白川の辺り、中山の麓で質素な生活を送っている。出自はもちろん身分、職業なども不明だが、全体的内容からすると、深い学識と教養を備えている公家と考えられ、学問で身を立てようとしていたと予想される。まずそのような生活からの離脱として旅中関心を抱く諸相をみて行きたい。

まず出発早々に目にしたものは農民たちの畑で働く姿であった。

田中打ち過ぎて、民宅打ち過ぎ、遙々とゆけば、農夫双び立ちて、笛をうつ声、行雁の鳴き渡るが如し 田を打つ時は双び立ち



て同じく鋤をあげて歌をうたひてうつつなり。卑女うちむれて前田にゑぐつむ、存外ぬしづくに袖をぬらす。

これまでもどこかで目にしていたであろう農夫たちの姿ではあるが、荒田を打つ農夫や泥中からゑぐを摘む女たちの厳しい現実を前にして、単なる旅情の景観としてではない生々しい生活する姿を描き出している。作者は、自分の全く異なるこれら農夫たちと目線を合わせ、同情を持って描こうとしていると指摘するのは下西忠氏である。〔『海道記』にあらわれた情感〕『国文学論叢』33 龍谷大学国文学会1998・3）農夫の真の苦しみを同様に味わうことはできないまでも、その苦しみに同意を示そうとしているのは、農夫本来の姿を見極めていこうとする作者の態度の表れであり、結局それは人間そのものの存在にまで深まっていって行くであろうが、「京」での日常生活で、身辺を取り巻くものに対して注意と思索を重ねているからこそ、このように旅においても同じように物事に接していくのである。このような態度は「京」での生活と変わりがなく、離別といっても思考や態度に変化はない。

農夫の姿を再び捉えた描写に（尾張の国）

見れば、又、園の中に桑あり。桑の下に宅あり。宅には、蓬頭なるおんな、蚕簀に向かひて蚕養をいとなみ、園には、潦倒たる翁、鋤をついて農業をつとむ。大方、禿なる小童部といへども、手を習ふ心なく、ただ、足をひちりこにする思のみあり。弱くしてより業をならふ有様、哀れにこそ覚ゆれ。実に、父兄の教つつまざれども、至孝の志、自づからあひなるものか。

山田うつ卯月になれば夏引きのいとけなき子も足ひぢにけり  
と、桑園に生きる者のなり振りかまわぬ姿で働く描写であるが、女は蚕を飼い、今にも倒れそうな老人が鋤を振るい、さらに小さな子供ながら手習いなどを学ぶこともなく、大人たちの働く姿を前に寒さに耐えながら見ているのである。このような農夫たちの姿を通して、作者は人間の生きる姿をしっかりと見据えている。それは身分

を越え、一人の人間として生への営みを追求しようとする作者の姿勢が表れているのである。白井忠功氏も「旅をすることによって生命の実相にふれることができる」（『国文学解釈と鑑賞』特集Ⅱ紀行文学を読み解く―中古・中世 平成元年12月号）述べておられる通りである。

生への営みにふれることはこれら農民たちにとどまらず、市井の人々にも及んでいる。

関下の宿を過ぐれば、宅を及ぶる住民は、人をやどして主とし、窓にうたふ君女は、客を留めて夫とす。憐れむべし、千年の契りを旅宿一夜の夢に結び、生涯のたのみを往還諸人の望みにかく。翠帳・紅閨、万事の礼法ことなりといへども、草庵・柴戸、一生の観遊これおなじ。

桜とて花めく山の谷ほこりおのが匂も春は一時  
一夜の宿貸す主人も、遊女もさらに高貴な身分の者であっても、身分に貴賤はあるもの人間としての一生の楽しみは変わりがないのだと作者は述べ、お互いの生への営みを肯定的に捉えている。

これら農夫や遊女の生き方は、作者が「京」での生活環境からおよそ離れた世界ながら、人々によって淡々と営まれているものである。そしてこのことは、生きるという意味において何人もなら変わりが無いのだと述べている。

人間として生を肯定する作者の視線は、自らを不運と語っていた自身の内部へと向けている。「京」を離れるにあたり、作者に去来した心残りとは、ただ一つ

感恩の中に、愁腸の交はる事あり。母儀の老いて又幼き、都に留めて不定の再覲を契りおく。無状かな、愚子が為体。

とあるように、すでに幼児のごとくなくなってしまった母である。再び会う約束ながら、高齢の母ゆえ先の見えぬ約束であった。

今日明日ともしらぬ老人を独り思ひおきてゆけば、  
思ひおく人にあふみの契あらば今帰りこん勢多のなかみち

このような便りない老婆を置いて作者はなぜ鎌倉へ向かったのでしょうか。母に後ろ髪を引かれつつ「京」を立ち、旅中でまず目にしたものが先にあげた農夫の田を打つ姿であった。そこには人として生きるうえでの避けられない苦しみがあった。そして、その苦しみの中で淡々として生を全うしている人々を見、果ては遊女に至るまでその生き様にしっかりと目を向けてながら、人間として生きるつらさや楽しさは、身分を越え生活の場こそ異なるが、なんら変わりがないことを見出している。

作者の苦悩は立身出世がかなわなかった己が身の不運だけではなかった。出発の際にふれた老婆の存在である。

ただ、歎く処は、母山の病木、八旬の涯に傾きて、一房の白花、未だ開けざるに、子石の枯れたる苔、半百の波におぼれて、一滴の水菰、未だ汲まざる事を。朝に省み夕に定むる志、とげずして止みなば、仏に祈り神に祈る功、それ如何せん。

ここで作者と母との日常が少し見えてくる。病気で八十歳の母に対し、五十歳を過ぎても十分に孝行していないと述べている。多少誇張もあるだろうが、「朝に省み夕に定むる志」と、日頃こまめに母の許を訪れて世話をしなかつた作者の姿が具体的に述べられているのである。旅立つ以前の作者は、幼児のようになってしまった母を遠巻きに見ているだけであつたかもしれない。母の老いに作者は目前の自身の老いを重ね、正面からこれを捉えようとせず目をそらしてしまつたのであろう。「生」に対して背を向けていたのである。

作者の日常生活からの離脱とは、そのような自分からも、また無意識にもそうさせてしまつた一因である老母からの離脱でもあつた。それゆえ底辺で生きる人々の姿に、貴賤の隔てなく心を動かされたのではないだろうか。

又作者は出家遁世の身でもある。大岳の地で「年来、うちかなはぬ有様に思ひとりて髪をおろしたれば」とある所からもそう理解し

てかまわないと思われる。それでは仏道三昧の生活かと思うとどうも違うらしい。

世を厭ふ道は、貧しき道より出でたれども、仏を念ずる思は、遺思に怠る。四聖の無為を契りしも、一聖猶頭陀の道にとどまりき。単己が有為を厭ふ、貧しき己、いよいよ、座禪の窓にこそがはし。

と出家したばかりで俗世間に未練が残り、仏を祈念する思いが怠りがちであることが述べられている。まだまだ自分の身に備わっている仏性を顕現できる境地には当然到っていないで、「頭陀」に止まっているというのである。「頭陀」とは梵語で、衣食住に関する執着を払い捨てる修業（小学館本頭注）という。ともかく、それが普段の遁世生活の現状である。この現状からの離脱となると修業の旅ということになる。後半に「斗藪の為に暇を乞ひて出でしかども」とか「東国はこれ、仏法の初道なれば発心沙弥のことさらに修業すべき方なり」とあるように、凡夫と変わらぬわが身から離脱し、煩惱の曇りを払い、悟りの境地に到る修行の旅と考えてよい。「京」での生活ではなかなか思う様には行かない修業生活を一旦離れ、東国の旅で深めようというわけである。そこで問題となるのは東国への旅、または鎌倉の地がなぜ修業につながることになるのかということである。鎌倉での諸寺遊覧がその全てというわけではないだろう。やはり旅そのものが修業と考えるしかないであろう。山口の宿（小夜の中山）で「事の任社」を参詣する。

本地をば我しらず。仏陀ぞいますらん。薩埵にもいますらん。中丹をば神必ず憐れみ給ふべし。今身もおだやかに、後身もおだやかに、梶の村立は、三輪の山にあらずとも、恋しくは問ひてもまゐらん。願はくは、只、畢竟空寂の法味を納受して、真実不虛の感応を垂れ給へ。

思ふ事のままに叶へよ杉たてる神の誓いのしるしをもみん  
これは道中に存在する事任八幡宮に立ち寄り、修業の目的である

仏法の心理を得ることができるよう祈願している。このような機会には、他の寺社でもあろうが、しかし参詣だけが修業とは考えられない。やはり海辺で見たように「内面の旅」も深く関係するのである。現実目の前の諸相をよくよく観察し、人間のまた生き物の実態を理解していく。そのことが修業につながるであろう。末木文美士氏が仏教に一貫してあることは「現象世界の法則性、すなはち縁起の原理を正しく認識することが悟りにほかならない。ただ、凡夫は煩惱によってこの事実を見る目が曇らされているから、煩惱の曇りを払い、正しい認識に向かって修業に努めることが必要なのである」(『図説日本の仏教』第二巻密教「特集本覚思想」)と述べておられるように、この現実の世界の認識が肝心なのである。また大隈和雄氏が「遠大な旅の体験を持つことは名僧の条件であったとしてもよいであろう」(『新日本古典文学大系』「紀行文と中世の文化」月報20、岩波書店)と述べる点も、東海道という整備された街道の旅でも、作者の意中に存在していたかもしれない。このことは三木紀人氏も言及しているが、また三木氏は「蟹」と人間の対比(鳴海の浦)、「松」(潮見坂)「八橋」(三河の八橋)の擬人法をあげ、「本書にはその多用が目立つ。この種の表現は、非情のものも仏性を持つという湛然以来の天台の教えによるものであろう」(『日本文学と仏教』第九巻古典文学と仏教「第五章 紀行文文学―『海道記』の諸側面」といわゆる天台本覚論に基づいて論じている。やはりこの点も末木文美士氏が述べる「縁起」の認識につながるものであろう。

ここでもう一度母親のことに触れておきたい。「都に留めて不定の再観を契りおく。無状かな、愚子が為体」と旅に出発する前の叙述は簡略である。自己を責めても、結局は老婆から離脱するのである。後髪を引かれても出発する理由は存在するのである。吉良裕美子氏は「それを振り切つてまで彼を東国へ旅立たせたのは、この散つていった英雄たちの魂であった」(『前掲論文』)と宗行たちの鎮魂を指摘する。仏道修行の旅と位置するならばそのことも含めて、ど

うしても「京」に居ては願いが達成できないので仕方なく、離別せざるを得ないと出立前は考えていたとも考えられる。無一物・無係累での修業からみて、老婆が修業の妨げ「ほだし」との意識は多少存在したと考えられる。旅から帰郷する際の叙述には

我聞く、仏神は孝養の為に擁護の誓いを発し、経論は報恩の為に讃嘆の詞を述べたり。

と仏神は孝養を讃えることを述べる。

壮齡の昔は、将来を憑みて天に祈りき。衰邁の今は、先報を顧みて身を恨む。若し是、不信の雲に覆はれて、感応の月の顕れざるか、若し是、過去の副因を植えずして、現在の貧果を得たるか。先報によるべくは、仏の誓、憑むや否や、誓願によるべくは、我が孝、何ぞ空しき。信なるや否や、共に惑ひて妄恨みだりにおこる

と身の拙さを顧みて、因縁に従うべきか、誓願を信じるべきか、過去から現在までの迷いが述べられて、そして

天眼あひなだめて哀れみを垂れ給へ。悲母の目の前には、中懷を謝して白髪をおろし、愚子が身の上には、本望を遂げて墨衣をきたる事を。夢の間の筭は、たとひ一旦の雪に求め失ふとも、覚路の蓮は、必ず九品の露に開き置くらん。子養は子の志につくす、風樹は風残す事なかれ

と仏神は孝養を讃えていることを前提にし、出家遁世し修業して悟りの境地に到つたら必ず母を極楽浄土に迎えられるという確信に満ちた真情が吐露されている。この修業の旅の結果、到りついた認識を示しているとみえる。当然「ほだし」という存在ではないと作者は考えるに到つたとみる。

### (三) 最後に

旅の目的という視点からでなく、「京」からの離脱という点から

述べてきたが、右に掲げたもの他にもあげなければならぬ項目はあるだろう。例えば、栄達という望みは全くないが、朝廷の政権からの離脱ということも考えられる。しかしここでは出家遁世の身に必要ないと考えて掲げなかった。また美意識という点もあるかもしれない。ともかく、自然環境と生活そのものを中心に考えてみた。自然環境では海辺の描写に限ったが、鎌倉の描写は淡白で、景趣からくる述懐、内面の深まりは見えず、都に残してきた老母の心配だけである。鎌倉そのものも、序に見えた幕府の賞賛の割には描写は淡白で、単なる紹介に近いものであり、述懐も在り来りのもので深まりが見えない。人間の生きる姿が具体的に見えないのである。目的地の鎌倉はさほど感慨に満ちた所ではなかったと解釈するのが適当なのかもしれない。そしてしきりに帰京を願うのである。これはやはり、吉良裕美子氏が述べるように(前掲論文)「花の京」を再認識することであり、作者自身が「京」の人間であるというアイデンティティを確認したということであろう。もとより表現も美意識も「京」で培ったものから離脱しているとは窺えないのである。

しかし海道の景趣からの感動は「生」の肯定に満ちている所が多い。それは都での生活にはなかったものである。離脱したからこそ得た感慨であろう。

仏道修行が目的の一つであることは否定できないが、わずか二週間の旅で煩惱を払い、仏性を顕現できたとは作者自身も考えていないだろう。「まったく修行を必要とせず凡夫の状態のまま現象世界が全的に肯定されるようになったのが本覚思想」と末木氏が解説する(前掲書)、いわゆる「本覚思想」とは異なるものであろう。作者の仏道修行は従来の仏教観で考えるべきものであろう。